

「家政学」を日本女子大学家政学部で学ぶこと

家政学部長
住居学科教授 石川 孝 重

入学おめでとうございます。私は家政学部住居学科の教員で、現在は家政学部長の職にありますので、この機会に「家政学部」について紹介したいと思います。

家政学部は本学でもっとも長い伝統を持つ学部です。本学は一九〇一（明治三四）年に日本女子大学校として開校し、家政学部は国文学部（当時の名称）、英文学部（同）と共に創設されました。また、戦後の一九四八（昭和二三）年に新制大学へ昇格し、家政学部と文学部の二学部で発足しました。大学の年表は第一章に掲載されていますが、家政学部が現在の五学科体制になるには多くの変遷を経てきています。紙面の都合上、戦後に限って述べることとします。

一九四八（昭和二三）年段階では、家政学部は児童学科、食物学科、生活芸術科（住居学専攻及び被服学専攻）、社会福祉学科、家政理学科一部（物理・化学専攻）、家政理学科二部（生物農芸専攻）で構成されていました。その後、一九五八（昭和二三）年に社会福祉学科が文学部に所属を変更（同学科はその後人間社会学部に移行）。一九六一（昭和三七）年に生活芸術科が、住居、被服の各専攻の専門性を深めるために住居学科と被服学科とに独立。一九六四（昭和三九）年に家政経済学科が増設。一九九二（平成四）年に家政理学科一部・二部が理学部（数物科学科・物質生物科学科）に拡充改組。こうして現在の児童学科、食物学科、住居学科、被服学科、家政経済学科の五学科構成となり、今日に至っています。

戦後いち早く新制大学として昇格を果たしたことで、家政学部は日本の大学における新制家政学部設置の第一号となりました。わが国における家政学という新学問体系は、本学家政学部の発足と同時に始まり、発展したといえます。しかし、この設置認可を受けるまでにはそれまでの長い実績にもかかわらず多くの困難があり、当時の関係者の粘り強い運動の賜物であったことは忘れてならないことと思います。

ところで、家政学部の目的は何でしょうか。これについては「人材養成・教育研究上の目的」として、「家政学は人間の生活を科学する実践的総合科学である。家政学部では生活の科学を学び、生きる力を養うとともに、生活の質を向上させ社会をより豊かにする力を持ち、人類の健康、安全、福祉に貢献したい」という意欲あふれる女性を育成することを目的とする。」と規定されています。少し抽象的かも知れませんが、この理念を具現化するための取り組みを二つほど紹介します。

一つはカリキュラムの「家政学部共通科目」です。家政学についての総合的理解をはかることを目的として、学科の枠をこえて履修できる科目群です。家政学は広い学問領域を有する実践的総合科学ですから、共通科目の履修を通じてその全体像や魅力に迫ることができるでしょう。履修登録単位数の上限はありますが、多くの科目を学んでいただきたいと思っています。

もう一つは、二〇〇八（平成二十）年に設けた「家政学部賞」です。「私たちの生活をより合理的で豊かなものにするために、家庭生活や生活環境に関わる諸問題を自然科学的・人文科学的・社会科学探求し、人類の福祉に広く貢献する個人および団体の活動を奨励する」ことを目的として、毎年度五件以内を表彰しています。受賞記念講演会も開催しておりますので、学生のみならずぜひお越しください。授賞対象などの詳細はホームページに掲載していますので、ぜひご覧ください。

本学創立者の成瀬仁蔵の家政学部構想は、家政学部の使命を家庭生活向上、社会改良と位置づけ、卒業生に対しては社会貢献を当然としたものでありました。私も大学での学問は社会のこれからのためであると考えています。特に家政学部での学問は、知識や技術の教授にとどまらず、それを実際の生活に活かしていくことが大切だと日頃より思っています。

二〇一一年三月十一日に発生した東日本大震災では多くの尊い人命が失われました。誠に悲しみに堪えません。若いみなさんの力は、社会を復興し、変えていくエネルギーに満ちています。社会に貢献するために何を学び、どのような行動をとるべきか、どのように社会の問題を解決していくのか、そこまで見据えて大学生活を送っていただきたいと願っています。

日本女子大学、なかでも家政学部での学びがみなさんの礎になり、社会の一員としての自覚と、公共の福祉に貢献されますことを切に期待しています。「自学自励」、これが大学で学ぶみなさんの基本である。ことを今一度確認してこの文章を閉じたいと思います。